

**白馬村教育振興基本計画策定のための  
アンケート調査報告書**

**令和5年  
白馬村教育委員会**

## 1 調査目的

白馬村教育委員会では、2020年12月に「学校のあり方検討委員会」を設置し、村内の小中学校において、児童・生徒数の減少や学校施設の老朽化に対応しながら、将来に渡って質の高い教育を維持するため、どのような教育環境が必要かを総合的に議論していただき、2021年11月に答申をいただいた。

委員会では、村内小学校の「2校の存続」と「1校に統合」についても触れ、学校の適正規模・適正配置や望ましい学校の姿に対して、幅広く住民の声を聞くようにとの答申がなされている。

本調査は、今後新たに策定する「白馬村教育振興基本計画」の基礎データとして、子どもたちの学習や生活状況、学校の適正規模・適正配置や教育環境に対する村民各層の意識を把握することを目的に実施した。

## 2 調査対象

調査種別	調査対象
①小学生調査	村内の小学校の4年生～6年生
②中学生調査	白馬中学校の1年生～3年生
③教職員調査	村内の小中学校の教職員
④保護者調査	村内の小中学校、保育園、幼稚園の保護者
⑤一般村民調査	村内に住む男女1,800人を住民基本台帳から無作為に抽出し（ただし、上記①～④の対象者は除く）、調査の対象とした。

## 3 調査方法

調査種別	調査対象
①小学生調査	小学校を通じてアンケートを依頼、Googleフォームから回答
②中学生調査	中学校を通じてアンケートを依頼、Googleフォームから回答
③教職員調査	小・中学校を通じてアンケートを依頼、Googleフォームから回答
④保護者調査	小・中学校、保育園、幼稚園を通じて各家庭にアンケートを依頼、Googleフォームから回答。
⑤一般村民調査	郵送配布・郵送回収にて実施し、紙媒体で回答。

#### 4 調査期間

調査種別	調査実施期間
①小学生調査	令和4年8月22日 ~ 令和4年9月13日
②中学生調査	令和4年8月22日 ~ 令和4年9月13日
③教職員調査	令和4年8月22日 ~ 令和4年9月13日
④保護者調査	令和4年8月22日 ~ 令和4年9月13日
⑤一般村民調査	令和4年10月11日 ~ 令和4年10月31日

#### 5 設計数及び回収率

調査種別	設計数	有効回収数	有効回収率
①小学生調査	196人	164人	84%
②中学生調査	211人	189人	90%
③教職員調査	74人	61人	82%
④保護者調査	690人	191人	28%
⑤一般村民調査	1,800人	644人	36%

※一般村民調査では、白馬村に住民登録されている6,307人から、許容誤差5%、信頼レベル95%のサンプルを得るために抽出数を設定した。

※母集団から上記の条件を満たすために約360の回答数を設定した。その回答数を得るために、アンケートの回答率は20%と想定し、 $360 \div 20\% = 1,800$ として抽出数を設定している。

※回収率は36%であり、想定以上の回答率であった。

## 6 回答の考察（対象者ごと）

### 小中学生へのアンケート

アンケートの回答について、傾向や意識を考察する。まず、児童生徒へのアンケートについてであるが、質問の構成は以下のとおりとして、小学生高学年と中学生にアンケートを行っている。

基本事項	在籍校 学年 家族構成
学校全体に関する事	学校は楽しいか その理由
学校生活に関する事	困っていること 学校に望む事
学習に関する事	得意な科目 苦手な科目
人間関係に関する事	先生への相談
人数に関する事	クラスの人数 クラスの数 学校の規模
通学に関する事	通学時間 通学方法 満足度
施設に関する事	いいなと思う校舎
生活に関する事	習い事 生活時間 お手伝い 家族との会話 いま関心があること 相談できる人
自分に関する事	自分のことは好きか 自信をもてること 尊敬する人 将来なりたい人物像

それぞれの項目での児童生徒のアンケート結果を比較しながら考察する。まず基本的事項についてであるが、児童・生徒共に 84%から 90%と高い回収率であった。そのため、所属学校や学年なども偏りが少ない回答となっている。

家族構成では、核家族世帯が 70%を超える結果となっている。なお、令和 3 年国民生活基礎調査（厚生労働省）による世帯員と世帯人員の状況では、児童のいる世帯は全国で 1,073 万 7,000 世帯であり、うち核家族世帯は 886 万 7,000 世帯、割合として 82.6%という数値が公表されている。近年移住される人が増え、核家族化が進んではいるものの、民宿など観光を生業としていることも影響しているかと思うが、全国よりも多少低い数値となっている。次に「学校全体に関する事について」に関する回答で、児童生徒に投げかけた問いは「学校は楽しいですか」とストレートな問いであった。ともに「とても楽しい」「まあまあ楽しい」が 90%を超える回答であったが、中学生になると「とても楽しい」の回答が

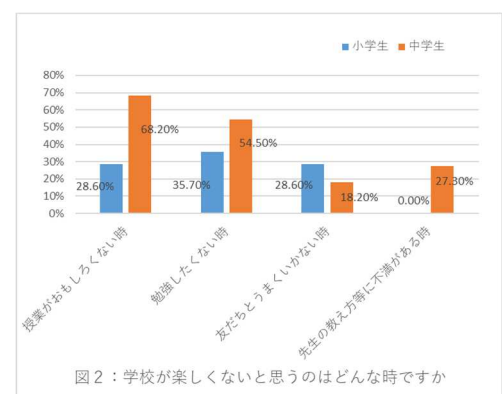
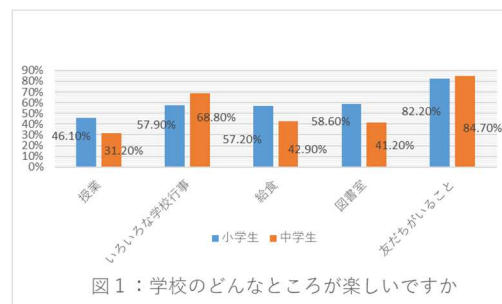
減少し、「あまり楽しくない」「楽しくない」が増加する結果となった。「とても楽しい」「まあまあ楽しい」の理由の違いを比較すると、小学生で比較的高い回答であった、「授業」「給食」「図書室」などの学校生活に関することは、中学生になると回答がさがり、「学校行事」「友達がいること」などが増えている(図1)。これは、学校や集団生活に楽しさを感じる小学生世代と、個人の自発的活動や友人関係を重視する中学生世代の違いが表れているのではないかと推測する。

「あまり楽しくない」「楽しくない」の理由の違いでは、中学生になると「授業」「勉強」に対する回答が増加し(図2)、集団生活への不満よりも、個人の欲求や学習へのあせり、不安などが表れているように感じられる。しかし次の質問の「学校で困っていること」については半数近くは「特にない」と回答しており、不満はあるものの、学校が原因となって困っていることは少数となっている。児童、生徒を比較すると、前問の傾向と同様で、中学生になると人間関係については減少、学習面は増加の傾向となっている。この傾向は「学校や先生に望むこと」の間でも現れており、小学生では授業内容や先生とのふれあいなど集団生活の中での関わりに対する欲求が多いが、中学生になると「勉強がわかるように」「一人ひとりの力に合わせた」など個人としての欲求が多くなっており、集団で活動する年齢層から、自立し始める年齢層への移行が表れている。

なお、GIGA スクール構想により小学生にもタブレットPCが整備された影響で、小学生ではタブレットやコンピューターを使う学習への欲求が多いが、中学では以前から導入済であったため、PCを使用した学習への欲求は少ない。

次に学習に関することに対する回答では、児童生徒ともに「好き」「得意」な科目は体育や図画工作・美術であった。しかし、小学生で人気のあった「理科」「音楽」は中学生になると減少している。教科が専門的で難しくなることとなどが一因ではないかと考えられる。このことは「英語」で顕著にみられ、小学生で「苦手(嫌い)」は27.2%であったものが、中学生になると48.9%に大きく増加している。小学生の「好き」「得意」の部分で数値の低い「国語」「算数」「社会」は、「嫌い」「苦手」の分野で、そのまま数値が増加している。なお、令和4年度に実施された全国学力・学習状況調査によると、白馬村の小学6年生では、国語が「全国平均をやや下回る」、算数と理科が「全国平均と同程度」であった。また中学3年生では国語、数学、理科ともに「全国平均と同程度」という結果であった。小学生ではアンケート結果と傾向が一致したが、中学生では勉強習慣も定着し、平均的レベルに落ち着いているように見られる。

次に人間関係に関する回答では、授業以外で、個別に先生に教えてほしいことはあるかの問いでは、小学4年生から中学1年生になるまでは「ある」の割合は減少していったのち、中学2、3年生と増加に転じる結果となった。先生に頼る傾向から徐々に自立し、その後受検や進路など様々な悩みが増え、先生に相談したい傾向が出たのではないかとと思われる。



次に人数に関する回答では、1クラスあたりの人数については、南小では「10～19人」、北小では「20～29人」、中学では「20～29人」が良いとする回答が一番多くなっている(図3)。これは、それぞれ現在所属する学級の人数が良いと答えた結果であると思われる。選んだ理由については、多人数の選択理由は「いろいろな人がいて面白いから」や「人数が多いとにぎやか」などの理由が多数を占め、少人数の選択理由では、「まとまりやすい」「勉強がしやすい」などの理由が多数をしめている。クラス数については、小学生では1クラス、2クラスが良いという意見が多いが、中学生になると3クラス以上という意見が増えてくる(図4)。理由としては、友達関係が広がる、学校行事が盛大にできる、切磋琢磨ができるなどの意見が多く、小学生ではクラス内での活動が、中学生になると、南小と北小の児童が一緒になり、人数も増えて学年内で切磋琢磨する活動や行動範囲が広がることから3クラス以上あった方が面白いといった意見が増えるのではないかと思われる。また学校の満足度については、学校規模、クラス規模等に関する満足度では小中学校ともに90%以上が満足、どちらかといえば満足といった回答であった。

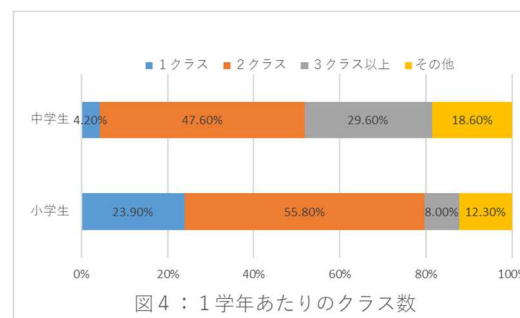
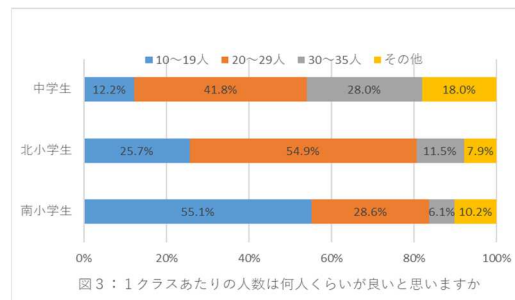


表1：通学時間と方法に関してどれが良いですか

小学生				
時間	15分以内	30分以内	45分以内	その他
		29.40%	33.10%	25.60%
方法	徒歩	スクールバス	その他	
	50.90%	24.80%	24.30%	
中学生				
時間	15分以内	30分以内	その他	
	58.80%	27.80%	13.40%	
方法	徒歩	自転車	スクールバス	その他
	14.30%	60.80%	11.10%	13.80%

通学に関する項目については、表1から通学時間は、小学生は58%が30分から45分以内が良いと答えている

が、中学生では58%が、15分以内が良いと答えている。中学生が良いと思う方法で回答では60%が自転車と答えているので、小学生と中学生の時間の開きは、徒歩なら30分から45分以内で、自転車なら15分くらいが良いという傾向の回答になっていると思われる。通学に関しては小学生中学生ともに「友達と歩くのが楽しい」「歩くと運動になる」といった意見が共通して見られる。

施設に関することでは、建て替えを予定している小学校の良いと思う校舎についての問いでは、南小では「広くて大きい学校など空間や設備面」での希望が見られるほかに、「今のままがいい」などの意見も見られる。北小では、「広くて過ごしやすい」「トイレがきれい」などの他に「床や壁は木がいい」「白馬の景色が見えたらいい」などの意見がある。両校とも共通するのは、図書館や遊具、体育館などの附属施設の充実に対する意見が見られる。

中学生の意見は多岐にわたり、「校舎」「交流」「使いやすさ」「景色」「ICT」「体育館」「トイレ、設備、備品」などがあつた。様々な意見があるが、大別すると「きれい」「快適」「広い」点についての意見が多い傾向となっている。その他の意見としては「楽しい学校」「のびのび過ごせる施設」などの意見があつた。

生活に関することについての回答では、学校以外での習い事は、児童生徒ともにスポーツチームが一番多い結果となった。また中学生になると学習塾の割合が増えるが、習い事にいかない「特になし」が増えていることにより全体では習い事に通う人数は減っている。

生活習慣では、小中学生ともに概ね規則正しい生活が確立されてる。中学生になると様々な活動や家庭



学習などが増えるため、食べる時間や寝る時間については決まっていないと回答する割合が増えている。また、家で手伝うことは、ご飯の準備や片付けであり、家庭での話題などについては、学校であったことや友達の事であるというのは、小中学生とも同様の傾向であったが、「家族と話すことはほとんどない」「将来の学校や職業のこと」の回答は中学生になると増える傾向にある。

児童生徒が気になっていることは、小学生では「特にない」が一番多く、「友だちのこと」が「勉強」を上回っているが、中学生になると「将来の学校や職業のこと」が一番多く、つぎに「勉強のこと」になり、「友だちのこと」や「特にない」は減少している。中学生になり、自立し始める年齢を迎え、高校進学や将来の職業を真剣に考え始めていることが表れている。

悩みについては、小中学生ともに概ねは「相談できる人」がいると回答している。小学生では、母親、友だち（同じ年）、父親の順であるが、中学生になると、友だち（同じ年）、母親、父親の順になるとともに、学校の先生などを含めて、大人への相談の割合は減少する傾向が見える。また、「インターネット」の回答割合も増えている（図5）。

自分のことは好きですかの問いに対し、中学生になると「きらい」「どちらかといえばきらい」が増えている。このことは「自分に自信のもてることはありますか」にも同じ傾向が表れており、中学生になると自分に自信を持てることが「ある」と回答する割合が減っている。学年別にみると、小学生は高学年に向かって「ある」の割合が上昇し、中学生では高学年に向かって「ある」の割合が減少していく傾向となった。

自らの将来像を尋ねる設問では、中学生は「いろいろなことにチャレンジする人」「社会の役に立てる人」など具体的な行動目標の割合が増加し、小学生に比べて具体的な将来像を描いている様子が見える。

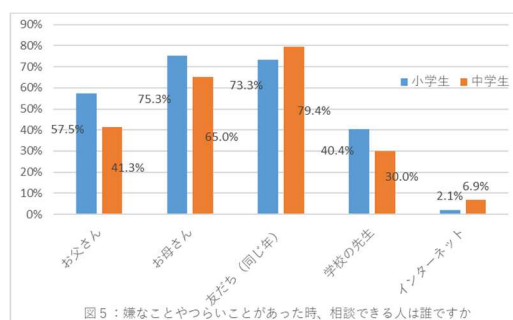


図5：嫌なことやつらいことがあった時、相談できる人は誰ですか

### 小中学生へのアンケート総括

小学生、特に高学年では集団の規則を理解して、集団活動にやりがいを感じており、中学生では自己を見つめ自らの生き方を模索して、「個」を重視し、また大人との関係よりも、友人関係に自らへの強い意義を見出す傾向がある。

北小学校児童、中学生の多くが、20人～35人、2～3クラスを望んでいる。友人関係の広がり、クラス替えが可能、大人数による切磋琢磨などが理由となっている。中学生の中には、学級数や人数の少ない南小卒業生も含まれており、少人数学級と標準人数学級を経験した生徒の意見が反映されていて、学校の活動をする上で、児童生徒はある程度人数が居る方が理想と思っているようだ。

小中学生のおよそ5%が「家族と話すことはほとんどない」と答えており、親子のコミュニケーションが不足する思春期特有の課題が表れている。

## 教職員、保護者に対するアンケート

次に直接学校に関係する教職員及び保護者に対するアンケートについて考察する。

質問の構成は、以下のとおり

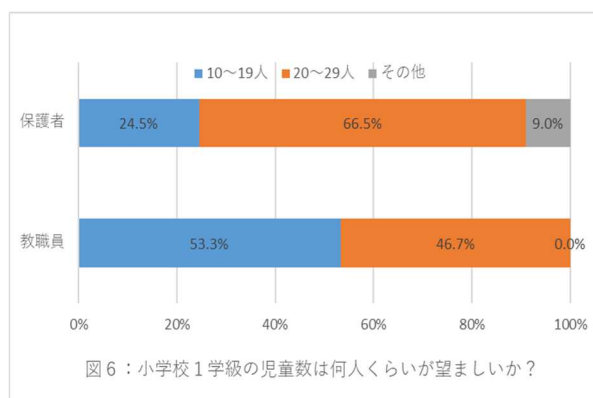
基本的事項	所属 居住地
人数について	クラスの人数 クラスの数 学校の規模
通学について	通学時間 通学方法
小学校の規模について	2校存続 統合
小規模校について	メリット デメリット
学校施設について	望むこと

まず回答者の割合であるが、アンケートは小中学校の教職員と保育園、幼稚園、小中学校保護者を対象に実施したもので、お住いの行政区、通う学校等については、偏りなく回答を頂いた。また教職員についても、すべての学校から回答を得ることができている。

最初に小学校の学級の児童数についてであるが、**図6**から教職員の回答は、10～19人と、20～29

人の2回答に絞られた。どちらかと言えば10～19人が若干多くなったが、ほぼ同数となっている。教職員の受け持つ児童数という視点からすると多くても30人以下、少なくとも10人以上が教育活動を進めるには望ましいと考えていることが伺える。少人数の理由では「目のとどきやすさ」、大人数の理由では「切磋琢磨し、社会性や協調性」などが挙げられている。しかし、保護者の意見は20～29人が66%を占め、理由としては

「社会性や協調性を身に付けさせたい」ことが多くを占めて、小学生年齢で保護者の望むことが表れているようである。



次に中学校1学級の生徒数については、教職員の回答は、20～29人の割合が児童数の設問から大きく増加し83%を占めるとともに、30～35人といった回答も3.4%あった。この傾向は保護者にも同様の傾向がみられ、30～35人が17%と増え、10～19人が10%と減少している。小学生年齢に比較して、自立し始める中学生年齢では、少人数での個別指導よりも、大人数の中で切磋琢磨しあう環境が望まれている傾向が見える。教職員、保護者ともに中学生は集団の中で生きる力をつけさせることを求めている。

次に1学年あたりの学級数についての設問であるが、保護者、教職員ともに同様な傾向の回答となって



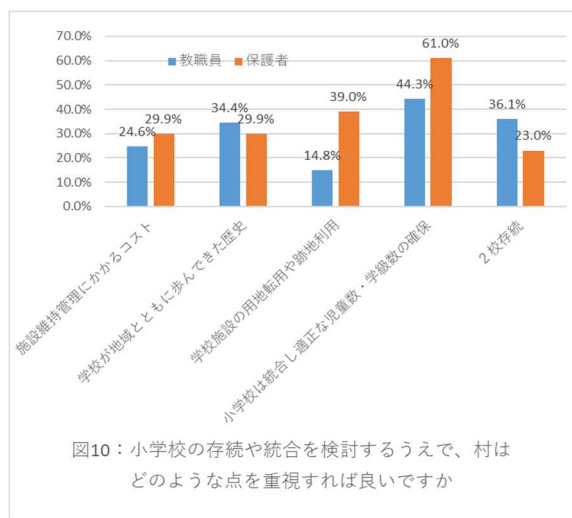
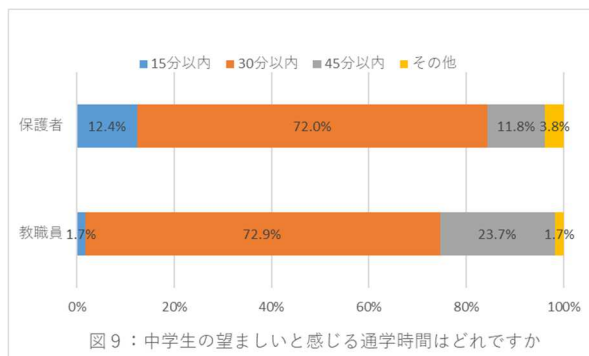
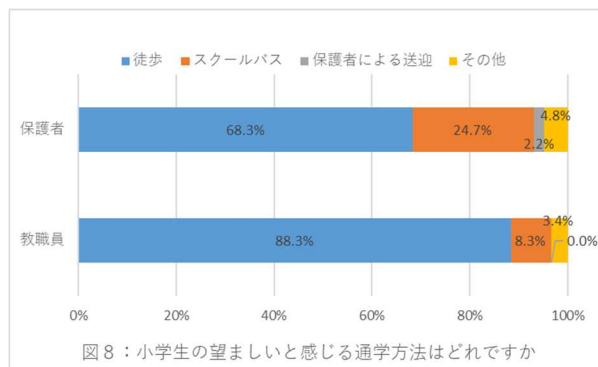
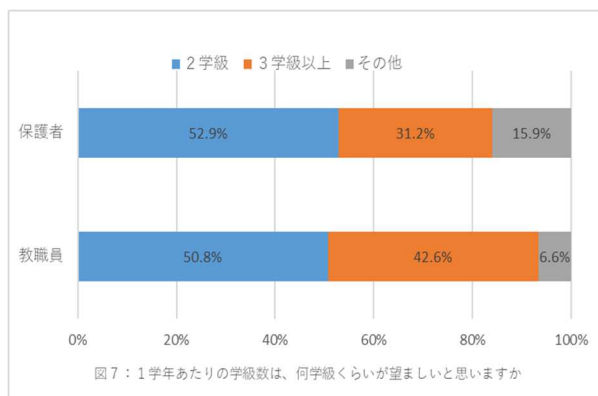
いる。半数は2学級が好ましいとの回答であり、30から40%が3学級となった(図7)。保護者への設問で、現在の学校規模への満足度を回答していただいているが、80%ほどが「満足」「ほぼ満足」としている。

次に通学時間と方法についてであるが、教職員、保護者ともに小学生の望ましい徒歩による通学時間は、30分以内が一番多い回答であった。教職員は15分以内から45分以内の回答であったが、保護者では60分以内といった回答も2.2%あった。また、望ましい通学方法は、図8から教職員は「徒歩」が88%、ついで「スクールバス」となり、「保護者による送迎」はなかったが、保護者は「徒歩」68%、「スクールバス」24%、「保護者」、「公共交通機関」と多様な回答があった。教職員は小学校としての望ましい通学方法を原則的な選択肢をし、保護者は、現在の通学方法や住んでいる環境から最適と考える方法を現実的な選択として回答しているようになっている。

中学生の徒歩又は自転車による通学時間は、保護者、教職員ともに30分以内が約72%と同じ割合であったが、保護者に回答が多かった「15分以内」は教職員ではほとんどなく、45分以内までがほとんどであった(図9)。体力が発達する中学生年齢においての望ましい運動量といった観点からも30分から45分が必要な時間とした考えも多いのではないと思われる。しかし、通学方法では、保護者において徒歩の割合が減少し、スクールバスの割合が増えているのは、小学生と同様の理由もあるが、通学範囲が小学生よりも広いことが要因であると思われる。

次に少子化を見据え、今後の小学校をどうしていくべきかの問いに対しては、図10から保護者、教職員ともに「統合し、適切な児童数等を確保する」が一番多い回答であったが、教職員は「2校存続」と「学校が地域とともに歩んできた歴史を重視」が次に続き、この2回答を「2校存続」と見た場合は、統合を上回る結果となる。一方、保護者は「跡地利用」や「コスト重視」などが「統合」に続くため、それらを「統合」といった意見とすると、「学校統合」とする意見が大勢を占める結果となっている。

少人数のメリットを生かす方法の設問では、「きめ細か



な指導」は教職員では1番、保護者でも2番目に多い回答であった。しかし、それ以下の回答では、教職員では「地域連携」「体験学習」と続くが、保護者は「体験学習」「実技指導」となる。保護者の回答には、教職員ではあまりなかった「白馬村独自の教育課程」にも多くの回答が寄せられている。この設問では、学校の立場として地域に期待する部分を回答したものと、地域住民が学校に期待する部分を回答したものととの立場の違いが回答に表れていると思われる。

### 村民に対するアンケート

次に一般村民に対するアンケートについて考察する。

質問の構成は以下のとおり

基本的事項	住所 年齢
学校について	重要と考える学校像
人数について	クラスの数 クラスの人数 学校の規模
学校規模について	学校規模
通学について	通学時間 通学方法
小学校の規模について	2校存続 統合
小規模校について	メリット デメリット
学校施設について	望むこと

村民アンケートは、すでに回答していただいた「児童生徒」、「保護者」、「教職員」を除く1,800名を無作為に抽出して行った。回収は644件で36%と、比較的高い回収率となった。また回答は村内すべての地区から回収されている。

年代別では、保護者等を除いたため、50代から80代までの世代が多く、70代が27.8%で一番多い結果となった。以上のことから、自らが回答できる全ての年代からの回答を得ることができたと考える。

最初に「重要と考える学校像」に関しての設問では、「白馬村の地域性や独自性を生かした特色ある教育」が一番多くなっているが、教職員や保護者が多く回答した「表現力やコミュニケーション能力を伸ばす」、「子どもたちの個性や自主性を育む教育」は、比較すると低い数値となった。教職員は「自他を大切に、心豊かな生活」「自ら学ぶ意欲」、保護者は「子どもたちの個性や自主性」「表現力やコミュニケーション能力」が一番多い回答となったので、教職員は「学力」、保護者は「個性」、一般村民は「地域」といった点に重点を置いているように考える。

次に1学級あたりの児童数についての回答は、保護者の回答とほぼ同じ傾向となった。「20～29人」が60.9%で、「10～19人」が21.3%である(図11)。この部分は、「10～19人」が一番多かった教職員とは大きく分かれることになった。回答の理由では「色々な人間関係があり、社会性や協調性を身に付けられる」が一番で、次いで「児童の一人ひとりに目が届き」となっている。児童一人ひとりに目が届く人数の認識が、一般村民と教職員では差が生じていることが結果として表れている。1学級あたりの生徒数についても一般村民と保護者の回答は同じ傾向となり、「20～29人」が一番多く、「30～35人」が2番目となっている。教職員は「20～29人」が83.1%で逆に「30～35人」は少数となっている。中学生年齢になると、自立してくる世代となることにより1学級あたりの人数は増やす方がよいと、それぞれ考えているが、目の届く適正人数については、児童数と同様に教職員と保護者、一般村民の認識がわかる結果となっている。

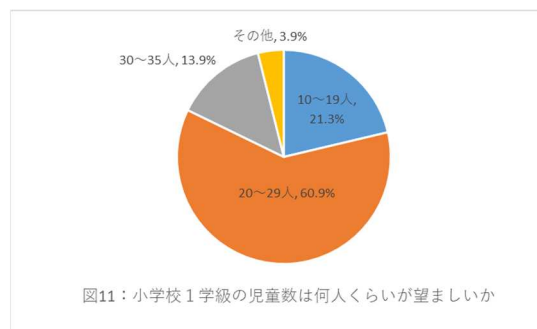


図11：小学校1学級の児童数は何人くらいが望ましいか

次に1学年あたりの学級数については、保護者、一般村民は「わからない」、「その他」などを選択する回答があるために割合は少なくなるが、全体の傾向は「2学級」、「3学級以上」が望ましいという結果である(図12)。これは現在の白馬村における児童生徒数から見た望ましい学級数として、それぞれに回答した結果であると考えられる。その理由としては、「行き届いた指導を受けやすい。」が一番多く、「クラス替えができて友だちが広がり、児童・生徒同士の関係を新しくできる。」「学校行事が盛大にできる」が続いている。また、3学級が望ましいと回答した人の中は、「クラス替えができて友だちが広がり、児童・生徒同士の関係を新しくできる」が圧倒的に多くなり、「行き届いた指導を受けやすい。」の3倍に近い回答数となっている。この傾向は、「ある程度の人数は必要」と思っている人が大半であり、指導に重点を置く考えの人は「交流ができる最少人数で2学級」を選択し、交流や活動に重点を置く考えの人は「3学級以上」を選択していると思われる。

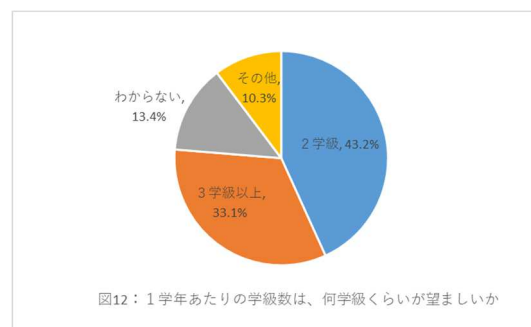


図12：1学年あたりの学級数は、何学級くらいが望ましいか

次に小中学生の望ましい通学時間と方法では、小中学生ともに30分以内の通学時間が一番多い結果であった。この結果はアンケート全体を通じて共通する結果となっている。しかし、通学方法ではスクールバスや公共交通機関、自転車など多様な方法に回答が分かれた。小学生は「徒歩」と「スクールバス」が多いが、歩いて体力をつけるといった考え方や、近年のクマや不審者などの影響もあり、「スクールバス」と回答された方が多かったのではないかと感じる。図13から中学生は「自転車」が一番多く、「徒歩」、「スクールバス」、「公共交通機関」と続くが、これには、自立して様々な方法で、自分で通学してほしい希望も込められているのではないかと考える。

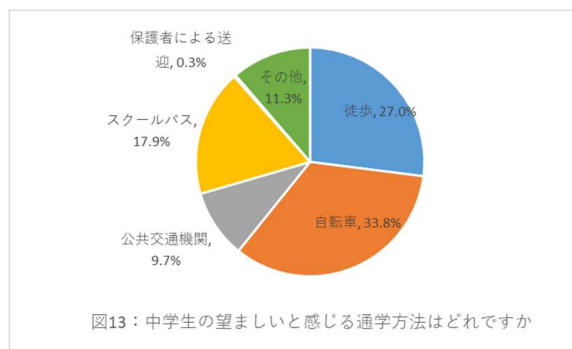
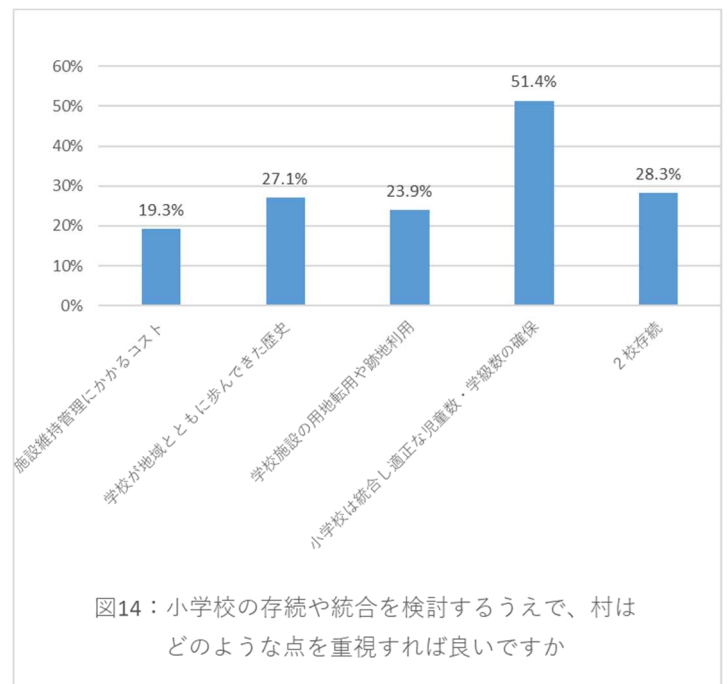


図13：中学生の望ましいと感じる通学方法はどれですか

小学校の存続や統合についての設問では、**図14**から「小学校を統合し、児童数・学級数を確保」が半数を超える回答となった。また、教員のアンケートでは2校存続が36%であったが、28%と減少する結果となった。統合以外の回答での傾向は教員と多くは変わらないが、施設維持コスト、地域とともに歩んできた歴史の回答割合が減少し、学校施設の用地転用や跡地利用の割合が増加しており、多くの方が将来的な人口減を見据えて施設縮小を考えているように感じられる。小規模校のメリット・デメリットについては、メリットを生かすためにはこの回答の傾向は教員と大きく変わりはないが、「きめ細かな指導」、「地域学習」、「体験学習」などの回答割合が減少し、「独自の教育課程で特色ある取り組み」が大きく増加しているのが特徴的である。少人数であるので、個別指導を重視する教員の考え方と、少人数であるので他とは違った取り組みを期待する村民とで回答が分かれたようである。デメリットを解消するための回答割合も大きくは違わなかったが、教員の回答に比較して小中学校間の教育活動、小中一貫教育に対する回答が増加する傾向となっている。



## 7 全回答の考察

全体を通じて回答を考察する。現在の学校や学級数等については、現在通っている児童、生徒、教職員、保護者を通じ、概ね満足している。しかし、学校の位置に起因する通学時間や通学方法について、好ましい時間、距離、方法は様々な意見があり、これは現状の通学方法等に対する希望や要望が出されたものであり、必ずしもすべての人が満足している訳ではないことの表れであると考え。学校の位置による通学時間は、概ね共通した意見であったが、その時間で通学するため方法については、保護者や村民は多様な通学方法を希望していることが回答に表れた。

また、学級の人数や教育方針については、教職員と保護者、村民では意見が分かれた。現場で児童生徒を指導する教員は、教員1名が、一人ひとりに目が届くきめ細かい指導をするための現実的な人数として少人数の回答が多かったが、保護者や村民は、現在の標準である35人学級が少人数のイメージであり、ある程度の人数は必要と回答しているために意見が分かれたものと思われる。現在、国では小学生は35人学級が標準となっており、今後少子化が進むにつれ、30人学級など、さらに少人数編成が進むことが予想される。

また、少人数を生かした教育についても「きめ細かな指導」をメリットとあげる教職員が多かったのに対し、保護者や村民は「独自の教育課程」を望む声が多い結果であった。村民等は、小規模校であることを更に強みとして、他の学校ではできない魅力的な教育活動を求めている。

学校の統合、2校存続に関する意識については、少子化を見据えて統合も止む無しとする意見が多い。これは前述の学級の人数にも表れているが、教育活動を行うに当たり望ましい人数を確保するためには学校の統合も必要と考える方が多かったと思われる。しかし、教職員の回答では、「2校存続」「学校が地域と歩んできた歴史を重視」の回答が多くあり、教育現場職員は、現状の人数、体制が維持できるのであれば、現在の体制が望ましい環境であると考えているようである。

今回のアンケートでは、現在の学校の状況や今後の学校規模、教育活動などについて広く意見を伺った。行政が行うアンケート調査としては、高い回答率であり村全体の意見として信頼できる調査であると考えている。村民の多くの意見は、「現在の学校」に満足しているが、少子化が進む状況において、好ましい教育活動を進める人数を確保するためには小学校を統合することも止む無しとしつつ、現状に合致した多様な通学方法や少人数を生かした魅力的な教育方針を望んでいることが回答から浮かび上がる結果となっている。